

第134回 令和7年12月1日（月）

「教えることについて。」

後輩ができた、部長になった、上司になったなど、ある程度の責任を持つ立場になると相手に指導的な立場で話をしなければならないことがあります。

何か相手に直してほしいことがあった時に、強圧的なものの言い方になってしまう人、相手に対して気を遣いすぎて何も言えない人がいます。

強圧的な人は自分も同じように強圧的に言われてきた経験がある場合があります。例えば私も昭和時代の部活動で育っていますが、先輩から強圧的な指導を受けると後輩にも同じような指導をすることが多かったように思います。

私は幸いあまり強圧的な指導を受けたことがなかったので（それでもゼロではありませんが）そのようなことはなかっただろうと思っています。（後輩がどう感じていたかはわかりません。）

大事な時に大事なことを言えない人は「嫌われたくない」という承認欲求が強い場合があります。例えば幼少期に自分が言った一言で仲間外れにされるなどのトラウマがあるとこのようになります。

一見優しそうなので周囲から嫌がられることはあります。が肝心な時に何もしないし、できないので信頼をされないことがあります。

本当は言ってあげたほうが相手のためにになるのに保身で言わないわけですから優しいわけではないかもしれません。

リーダーとして優れている人は「伝え方」を重視します。言わないという選択肢はないが、どのように言えば相手に伝わるのか、その方法を考えます。その結果厳しめに話すことが良いと思えばそうするでしょうし、オブラートに包んで話したほうが伝わるならばそのようにします。

相手によって、ケースによって、状況によって話し方を考えます。伝えることを大前提としてコミュニケーションの方法を模索しているわけです。

感情が高ぶっていたり、落ち込んでいたり、いじけてしまっていたり、相手の状況は様々です。いまはどの伝え方が有効なのか、リーダーシップのある人はそこの見極めに力を注いでいます。